

論文概要の和文様式

雑誌におけるタイトル:

The association between prenatal yoga and the administration of ritodrine hydrochloride during pregnancy: an adjunct study of the Japan Environment and Children's Study

和文タイトル:

妊娠中のヨガ(マタニティ・ヨガ)実践と、塩酸リトドリン投与との関連に関する研究: 子どもの健康と環境に関する全国調査における追加調査

ユニットセンター(UC)等名: 北海道ユニットセンター

サブユニットセンター(SUC)名: 旭川サブユニットセンター

発表雑誌名: Plos one

年: 2016 月: 6 巻: 11(6) 頁: e0158155

筆頭著者名: 川西 康之

所属UC名: 北海道UC

目的:

妊娠中のヨガ(マタニティ・ヨガ)実践について、日本人における効果についてはほとんど報告されておりません。塩酸リトドリンは、主に切迫早産に処方される子宮収縮抑制薬ですが、いくつかの副作用が伴うことが知られています。今回、マタニティ・ヨガと妊娠中の塩酸リトドリン使用との関連について調査を行いました。

方法:

エコチル調査北海道UC参加者を対象として、マタニティ・ヨガ実践について出産後に自記式質問票調査を実施しました。妊娠中の塩酸リトドリンの使用については、医療機関からの情報を使用しました。切迫早産の発症に関連する項目などを共変量として、エコチル調査第二次一部固定データと連結(2013年9月30日までに出産)でき、変数に欠損のない2,692名を解析対象としました。

結果:

567名(21.1%)がマタニティ・ヨガを実践していました。塩酸リトドリン使用割合は、非実践群30.6%(651/2125)に対し、実践群は24.5%(139/567)でした。ヨガ非実践群の塩酸リトドリン使用を1とした時、実践群の使用は0.77倍(95%信頼区間0.61-0.98)と、有意に少ない結果でした。妊娠中のヨガ実践時間が合計で900分を超える群では、0.54倍(0.38-0.76)とさらに低くなっていました。追加的に切迫流産を発症した人を除外して行った解析も、おおよそ同様の結果でした。

考察:(研究の限界を含める)

マタニティ・ヨガの実践は、塩酸リトドリンの使用リスクが低くなっていることと関連していることが示されました。これは、ヨガの実践によって、子宮収縮が予防され、塩酸リトドリンの投与が不要になったことを観察している可能性があります。しかし一方で、子宮収縮が明らかに認められる場合には、ヨガをしないように臨床医から求められることが知られています。今回は切迫流産(妊娠22週未満の子宮収縮や性器出血)の発症も調整した解析をしておりますが、ヨガを実践できる状況そのものが、子宮収縮を認めない状況にあるために、塩酸リトドリンの使用リスクが低下して見えていることを観察している可能性もあります。

結論:

マタニティ・ヨガの実践は、妊娠中の塩酸リトドリン投与リスクが低くなっていることと関連していることが示された。妊娠中に合計900分以上マタニティ・ヨガを実践することは、よりリスクを低下させる可能性があるが、いずれも今後さらなる研究が必要と考えられる。